

21世紀の富士塚／アート雲／本の山

私たちはアートと本、人々、貫井の街をつなぐ新しい公共建築を提案します。現代の富士塚のような建築は、美術館・図書館を人々にとって親しみが湧くと同時に、非日常性を感じる存在にしましょう。練馬の誇るアニメーション文化もあいまって、多様なアートや本が、互いに影響し合う、坩堝のような場所が生まれるでしょう。



01. 様々なレベルでこの場所に埋め込まれた、新しい中村橋のシンボルをつくります

0A 土地の記憶とつながる「富士塚」のような建築

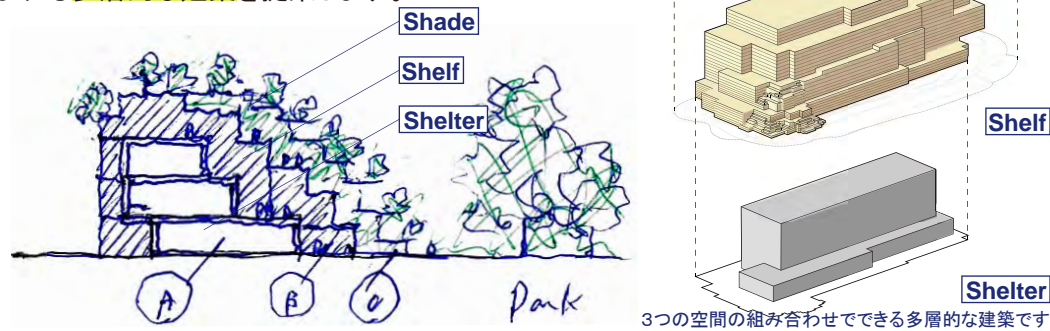
練馬区内には重要有形民俗文化財に指定された富士塚があり、今も人々の心よりどころとして賑わっています。遠方に望む富士山と近景のフィクショナルな富士塚。そこにある仮想現実的な創造力は、現代アートやアニメーションとも親和性があります。現代の富士塚によって、人々の記憶とアートをつなぎます。



下練馬の富士塚

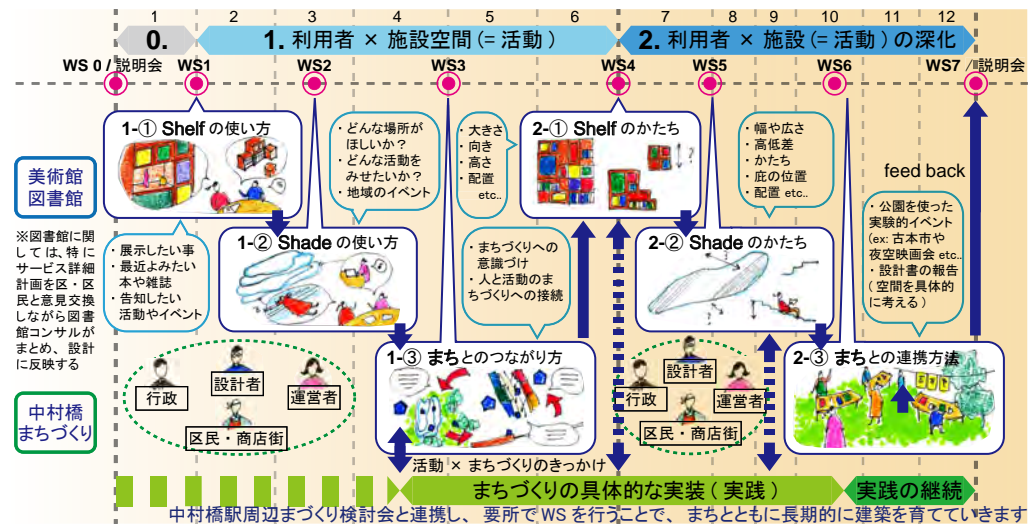
0-B. 幾重にも包みながら開く一貴重な美術品を守りながら、街に開かれた多様な場所をつくる

Shelter/Shelf/Shadeの三層構造を提案します。Shelterによって守られた空間(A)は完全に空調され幾重にも守られた貴重な美術品のための場所です。ShelfとShelterに挟まれた空間(B)はもう少しオープンな環境を許すアートや落ち着いた読書のための場所、ShadeとShelfのあいだの空間(C)は、街や公園に開かれた自由な活動の場です。開かれた建築をつくることと貴重な美術品を守ること—対極的な要求のあいだに、多様なバリエーションが生まれる多層的な建築を提案します。



1-A. 建築を育てるワークショップ 市民WS/職員WS,連携組織の構築

ShelfならびにShadeのあり方を中心として区民や商店街の方達、行政職員等とともに建築を育てていきます。建築空間が明確になった段階で、中村橋駅周辺地区のまちづくりとの連携を意識した公園の利活用を考えます。その上で、施設建設とまちづくりを連動した事業として活動を継続させながら、再度、まちづくりの観点も加味しつつ、同時に身体的なスケール感でShelf・Shadeのあり方を具体的に再考していきます。建築からまちづくり、そして建築と円環しながら、まちづくりと並走するプロセスによって、多様な人々とともに建築を育て、その動きをまちづくりとつなげ、建築とまちを一体的に育てていくこととなります。



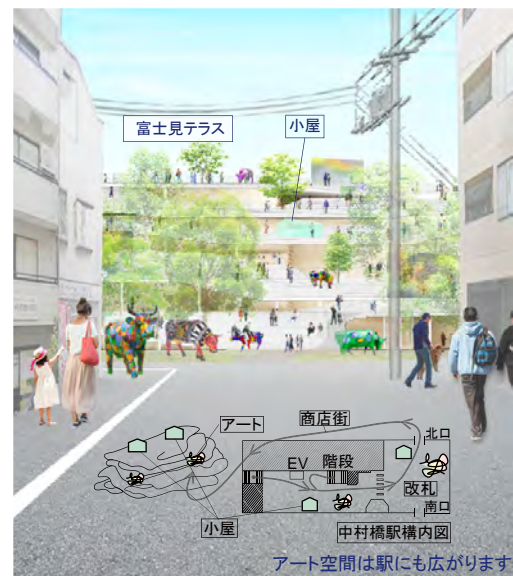
1-B. 商店街や映像と文化の街づくりにつながるアート・コミュニケーションコリドー

美術館と図書館を、中村橋駅、商店街や所々に設けられたアートのスポットが連なる大きな回遊路(アート・コミュニケーションコリドー)の一部として位置付けます。具体的には、美術館へのメイン動線を商店街を通るルートとし、来訪者と街の接点を強化します。他方で図書館へのメインルートは貫井の人々が慣れ親しんだ南東側に取り、ふたつの入口によって街との回遊を誘発します。これに「まちづくり部会」を中心としたエリアマネジメントが連携しさまざまなスポットを点在させることで、回遊経路がさらに拡がり、線路を跨いだ動きやより広く商店街を巻き込んだ人の流れが生まれるでしょう。また新設予定の補助133号線を介して、練馬城址公園に計画されているテーマパークと連動した人の流れも想定できます。



1-C. 公園や駅、小学校、区民センターとつながる

本計画は、公園のオープンスペースを立体的に倍増させるとともに、周辺施設とのつながりも重要視します。すなわち、電車利用者の視点から、建物の見え方を特徴あるものにした上で、ホームや駅構内等に、小屋のようなアートを設置して、「アート・コミュニケーションコリドー」に組み入れます。また、小学校とのつながりや図書スペース—ブックアートキッズスペース—公園をつなげて利用できるようにします。





ShelfとShadeの「あいだ」のスペースであるブックアートキッズの入口には、絵本工房で製作された絵本が並びます



背の高いアート展示等が行われたり、さまざまな展示方法を許容するShadeとShelfに囲われたエントランスゾーン

02. Shelfが介在することによって、美術館と図書館が様々なレベルで融合します

課題2
コンセプトを実現する空間づくり、融合による相乗効果

2-A. 三層構造による「静」と「動」の棲み分け

三層構造の空間A、B、Cを、静から動に多様に棲み分けします。図書館も動的で街につながる(C)から静かな読書空間(B)、書庫(A)の幅で展開します。ブックアートキッズはCとBにまたがる洞窟のようなスペース、カフェはCと公園にまたがるオープンなスペースに展開します。多様な「あいだ」が生まれます。

2-B. 本物のアートに多様に出会える美術館

Shelterの中の空間(A)は幾重にも守られ、公開承認施設として、動線や空調の考え方が整備されたものとします。これと相補的に、ShelfとShelterのあいだの空間は、セミオープンな環境を許すタイプのアートを配置できます。Shelfはまた、かつてCabinet of curiositiesと呼ばれた美術館の前身を思わせます。

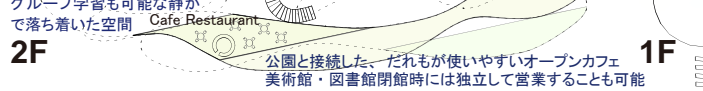
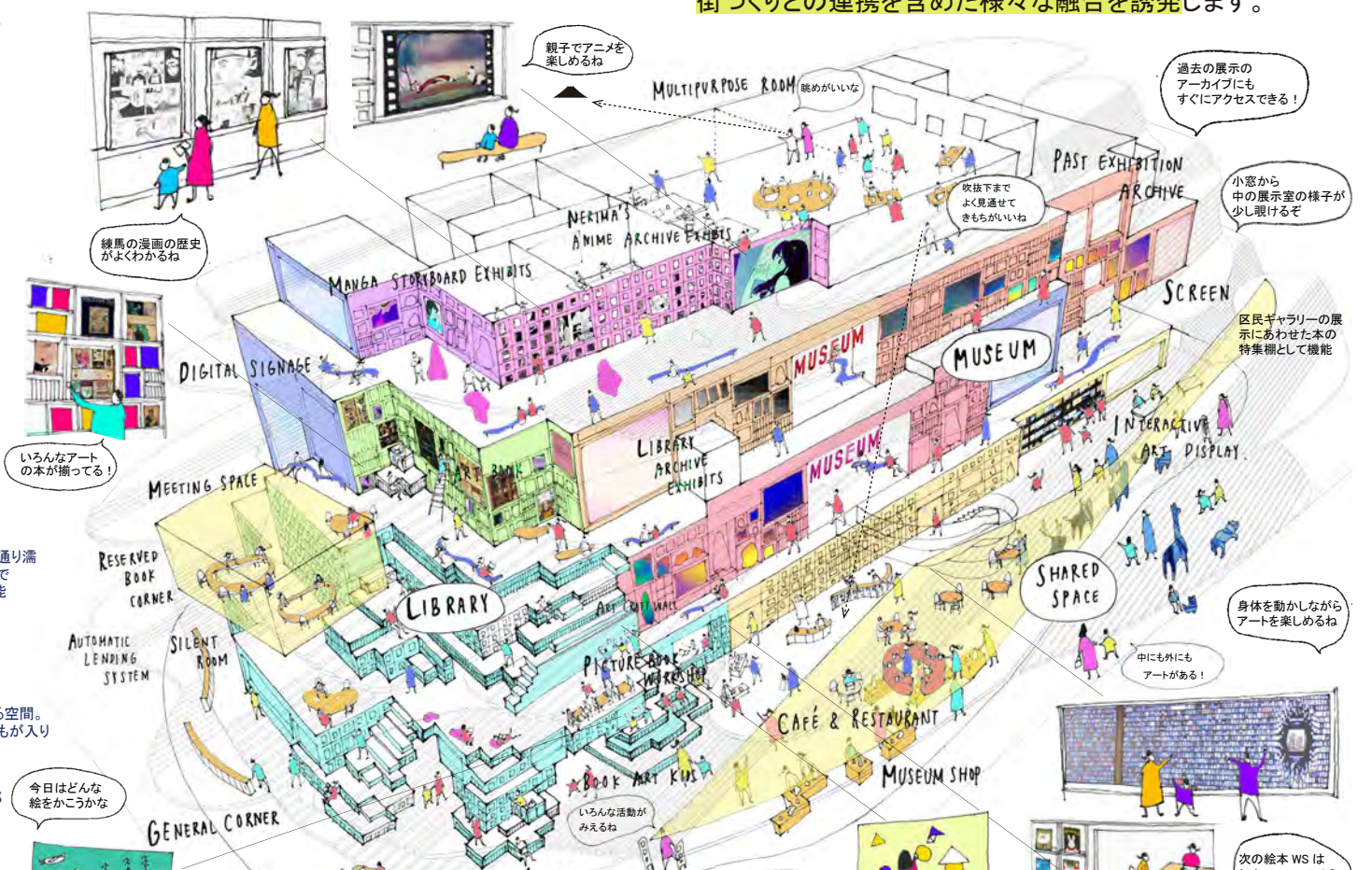
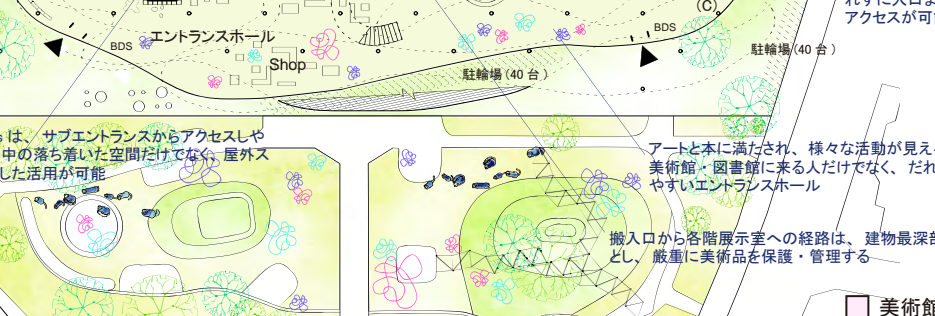
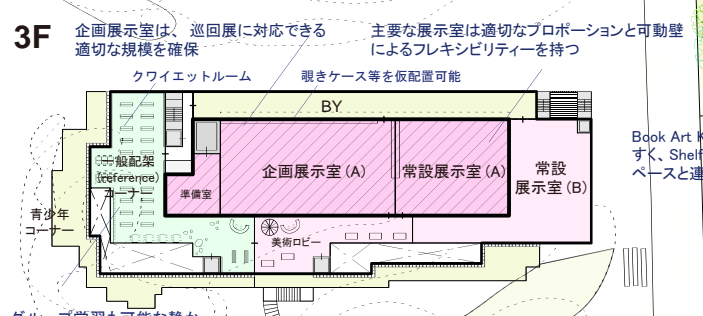
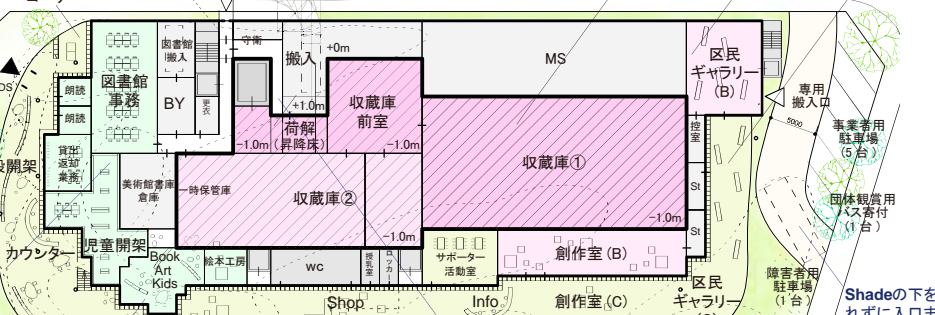
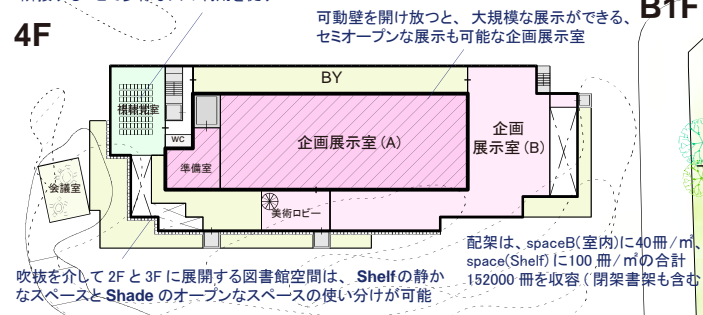
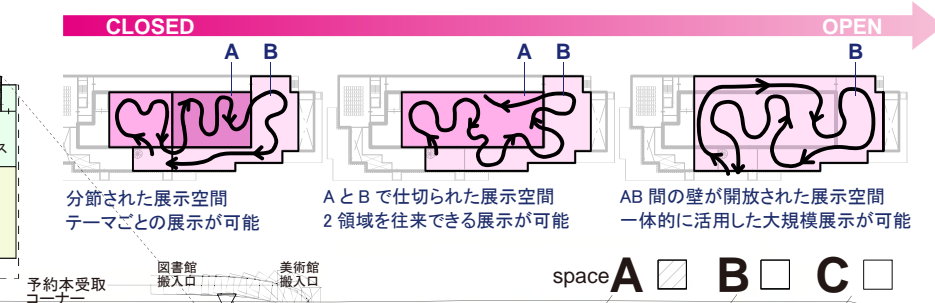
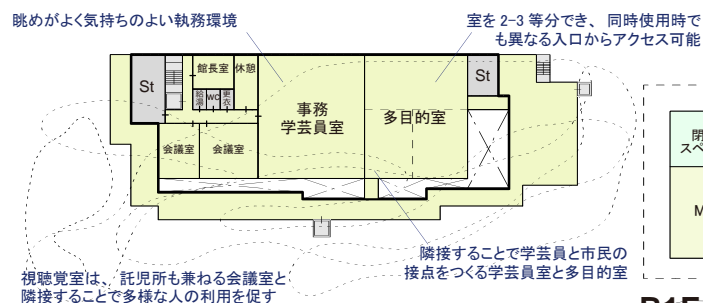


2-C. 開口部と大階段が入り混じる「富士塚」が生む交流

ガラス開口を通して区民ギャラリーなどが見え、行ってみたいくなる雰囲気をつくれます。また、大階段ではマルシェやフェスなど公園と連続した多様な活動を展開できます。大階段は普段から拡張された公園として人々を惹きつけ、様々な場所から内部が垣間見えることによって人々とアートの距離を縮めます。

2-D. 美術館と図書館が多層的に響き合う

美術館とも図書館とも親和的なShelfがふたつをつなぎます。展示会と関連した企画棚を設けたり、練馬にゆかりの深いアニメーションや漫画を媒介にして本とアートをつなげたり、多様な展開が可能です。また、スタッフ共通のラウンジ、ワークショップなどが行える多目的室を眺めの良い4階に設け、街づくりとの連携を含めた様々な融合を誘発します。



平面図 1F:1/800, 2-4F:1/1,100, B1F:1/1200



企画展示室は可動間仕切りを取り払うと空間Bまでを一体的に使用できる大規模ギャラリーになります



可動間仕切りにより、イマーシブ展示を含む多様な展示に対応します



空間Bの吹き抜けは、巨大なアートを展示するギャラリーとして使うこともできます



Shadeには公園との一体感を生かしたアクティビティが許容される、おおらかな場をつります

03. ランダムに見えてシステムティックな構成と、多重に最適化された環境がコスト抑制に寄与します

課題3 施設運営や利用者の視点に立った工夫

3-A. 全ての人に開かれたインクルーシブな建物

車椅子でどこでもアクセスできるのはもちろん、美術館の経路も基本的に共通のものとなるよう配慮します。カフェや屋上のテラスにも「**バリアフリー**」にアクセスできます。動線のわかりやすさや音環境にも総合的に配慮した心理的な「**バリアフリー**」を目指します。

視聴覚室

EVからアクセスしやすく、会議室（兼託児所）とも隣接し、誰もが利用しやすい配置とします。

カフェ・レストラン

公園から直接アクセスでき、美術館・図書館の閉館時にも独立して利用可能な配置とします。配架スペースと近接し、気軽に本を読むことも可能です。

区民ギャラリー

メインエントランスからも小学校前の通りからも、多様な人の目につきやすく、美術館とは別の搬入動線も確保された配置とします。

学芸員室 多目的室

最上階に配置することで、展示室や閲覧室への影響を低減するとともに、施設全体を見渡せる公園と連続した空間とします。

企画展示室

有料・無料区画に対応できる配置とし、区民ギャラリー搬入口からの動線を確保します。可動壁開放時は吹抜を介して展示室全体が立体的につながります。

常設展示室

現状の絵画コレクションを展示するスペースです。常設点のみの見学も可能とする配置とします。

美術館ロビー

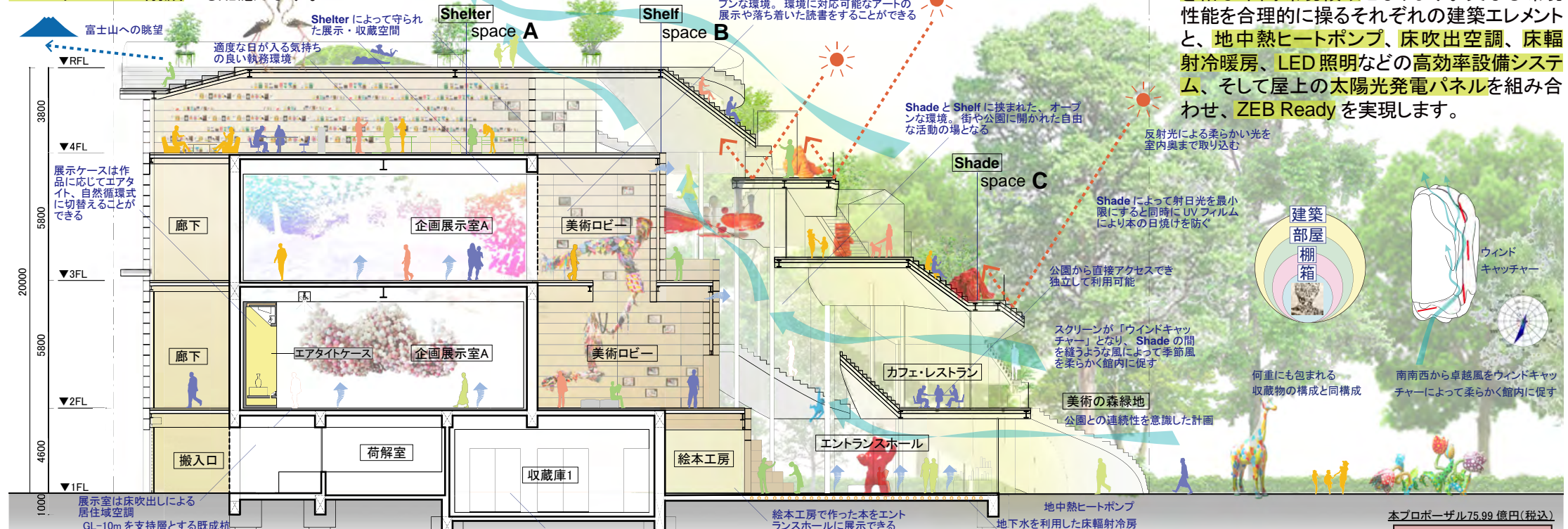
メインエントランスからアクセスし易く認知し易い配置とし、図書館との連続性も感じられる空間とします。

区民ギャラリー

メインエントランスからも小学校前の通りからも、多様な人の目につきやすく、美術館とは別の搬入動線も確保された配置とします。

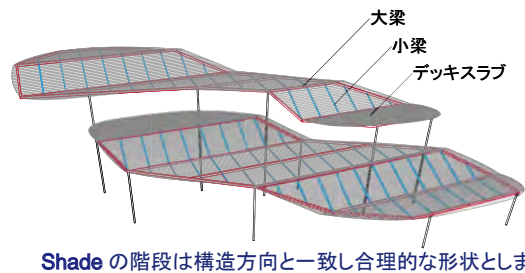
3-B. 美術館資料を施設全体で重層的に包んで守り、高いレベルでの保存環境を実現/IPM管理のしやすい施設ゾーニング

指定文化財等を含む多様な作品展示・収蔵には、**温湿度環境の確保と虫菌害対策**が重要です。収蔵庫及び展示室を施設中央に配置し一年を通し急激な外気変化の影響を軽減、作品を施設全体で幾重にも包む考え方で、**建築全体の気密・断熱性能確保と文化財 IPM 管理**を両立します。展示ケースは**エアタイト式**ケースを基本とし、作品の素材特性に応じて自然循環式に切替可能な機構を採用することで、**ゾーニングコストの削減**にも配慮します。



3-D. 合理的かつ剛強な構造でコスト抑制をはかる

既存地下躯体の解体を最小限とする建物配置・基礎計画とすることで、解体・建設にかかる **embodied carbon** の削減を目指します。伝統建築の鞘堂のように、本建物の最も重要な展示・収蔵スペース **Shelter** は、**構造的にも環境的にも最も守られた建物中心部にあり**、周りをレイヤー状に取り囲む **Shade** と **Shelf** により守られています。 **Shelter** は RC 造の閉じた箱状で、**経済的に剛強な耐震性を担保し**、S 造の **Shade** と **Shelf** と一体化することで建物全体の安全性を合理的に実現します。



Shadeの階段は構造方向と一致し合理的な形状とします

3-C. 周囲の環境をおおらかに取り入れる構成

高断熱高気密の **Shelter** はその温熱・光環境を常に安定して保ち、**Shade** は日差しや季節風を柔らかく館内へ促した、**Shelf** はそれらをつなぐ中間環境領域となります。異なる環境性能を合理的に操るそれぞれの建築エレメントと、**地中熱ヒートポンプ**、**床吹出空調**、**床輻射冷暖房**、**LED 照明**などの高効率設備システム、そして屋上の**太陽光発電パネル**を組み合わせて、**ZEB Ready**を実現します。

建築部屋 棚箱

公園から直接アクセスでき独立して利用可能

スクリーンが「ウインドキャッチャー」となり、Shadeの間を縫うような風によって季節風を柔らかく館内に促す

美術の森緑地 公園との連続性を意識した計画

何重にも包まれる収蔵物の構成と同構成

南南西から卓越風をウインドキャッチャーによって柔らかく館内に促す

スクリーンが「ウインドキャッチャー」となり、Shadeの間を縫うような風によって季節風を柔らかく館内に促す

ShadeとShelfに挟まれた、オープンな環境。街や公園に開かれた自由な活動の場となる

反射光による柔らかい光を室内奥まで取り込む

Shadeによって射日光を最小限にすると同時にUVフィルムにより日の焼けを防ぐ

3-E. 物価上昇を見越したコストマネジメント

常に経済状況を把握・予測し、物価変動の厳しい時代に対応したコスト管理を行います。業務の初期段階に超概算をし、**工事区分ごとに物価上昇に配慮した目標金額を明確にし共有**します。**ワークショップを一巡したところでズレがないか確認し**、**二巡目のワークショップでは調整しながら設計を進めます**。また、**早い段階で、提供できるサービスを定めることで後半の増額要素をなく**します。

本プロポーザル75.99億円(税込)	
建築工事	44.65億 (58.76%)
電気設備	8.33億 (10.97%)
機械設備	11.00億 (14.48%)
昇降機	1.09億 (1.44%)
植栽外構	0.51億 (0.68%)
展示設備費	3.59億 (4.73%)
収蔵環境整備費	3.82億 (5.03%)
解体費	3.00億 (3.91%)
*金額は全て共通費、消費税込内、共通費10.54億円(直工費の18%)	